My Favorite in Harp's song

ハープ　私の1曲

第3回 ハープ奏者／講師
高山 聖子『ブライアンボルーマーチ』
Brian Boru's March

喧噪に生きる現代人の間で、ケルティック音楽が静かに流行しているというのは合点が往く。シンプルで、ある種の覚醒性を秘めたメロディの繰り返し。音の行間にあたかも自分のスペースが用意されているような、なんとも言えない居心地の良さを覚えるアンビエント。われわれがこの世界観へ浸っていたいということは、現実の空間がいかに窮屈で、複雑で、小難しいかを物語るのかも知れない。

高山聖子はシーンの中では中堅ともいえるハープ奏者だが、グランドハープに加え、アイリッシュハープの啓蒙にも熱心なことで知られている。どうしてもグランドハープが上位概念にあることは、皆同じだ。アイリッシュハープの独特な魅力や、むしろアイリッシュハープでしか鳴らない、素朴なケルティックの小宇宙も実に美しいと看破するのは、クラシック至上の本邦シーンではまだ少しだけ勇気がいる。彼女もそんな一人だった。この曲との出会いは、2014年アイリッシュハープ・アンサンブル6重奏で演奏したのがきっかけ。弾いた時に、“アイリッシュハープは、グランドハープの小型の楽器。子ども時代の練習用楽器…”というイメージが、一気に吹き飛んでしまいまったという。幼少時代、レバーからハープに親しみ、グランドハープへと弾き継いで来ているだけに、この発見はある意味、衝撃的だった。「イ短調の哀愁漂うソロの旋律から始まり、一定のリズムの中、少しずつハープの音が重なりあっていきます。中盤ではフックを変えてニ長調へ転調して、最後は明るく華やかに終わります」。素朴であること=単純ではなく、アイリッシュハープはグランドハープに比べ、音の伸び時間が短く、そのぶん一音一音がクリアーなため、その音の重みや説得力が、むしろ弾き手によっては増していくということだろう。確かに、この曲のように多少憂いを帯びた、けれどもリズミカルなマーチは、彼女が語るように、しっかり弾き込むと文句なく格好がいい。また、ハープ・アンサンブルでこの曲に出会ったというのも、大きな転機となった。“お互いの足りない部分を補い、協力するという気持ち”で、音楽を仲間と作り上げていくことの楽しさ・尊さに触れたからだ。ハープという楽器の性格上、たとえプロでも周囲に同好の士がそんなに多いわけでもなく、ハープ同士あるいは他の楽器とのコラボレーションというのも、実はそう簡単には成立しない。果たして高山は、このアンサンブルでソロでは味わえない共演者との心の繋がりや、音を共に編んでゆく楽しさを再発見したに違いない。

高山の力量からすれば、音数の詰まった壮麗なクラシック曲を選曲するかと思ったが、たまたま出会ったケルティック音楽の佳曲から、音楽の美と本質の一端に触れたと推察すると、この曲はとりもなおさず、高山の音楽的成熟をさらに一歩前へ進めるきっかけになったのではないだろうか。まさしく、「縁は異なもの」である。

EVENT SQUARE イベント・スクエア

本誌協賛 8/1 SANAE
エレクトリックハープライブ「単独即興」

本誌主催 8/2 プレイ・ヴェルディ・ガラ・コンサート2019
ファビウス・コンスタブル、十字屋ハープカルテット他

本誌協賛 9/16 Petit Harp Festival 2019
古佐小基史、Machiko他 東京・ラリール

8/4 守安雅子（アイリッシュハープ）
横浜市旭区民文化センターサンハート

8/5 景山梨乃（ハープ）：客演
川口リリアホール

9/28 石丸瞳（ハープ）：客演
船橋市民文化ホール

The Last Chorus

●Harp Lifeでは、ハープにまつわるコンサートやイベントの協賛／協力を行っております。該当案件は、事前PRとして誌面もしくはWEBのHarp Lifeで告知する他、事後のリポートを掲載するケースもございます。但し、実施日3ヶ月を切った情報に関しては、扱いかねますので予めご了承ください。
お問い合わせ→ harplife@ginzajujiya.com

●古い映画ではありますが、「オーケストラの少女」という名作があります。20世紀の名指揮者レオポルド・ストコフスキーも本人が出演していて、大団円では「乾杯の歌」をやるのです。8/2のガラ・コンサートでは、同じような感動が生まれればと、切に願っております。皆さまもぜひご参加を。

●本誌と姉妹メディアであるハープライフWEBが好評展開中です。随時コンテンツも更新されておりますので、ぜひアクセスしてみて下さいね。

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

07
2019

SEVENTH ISSUE
Vol.7

UNA

Special Report from PIASCO

禁断のサルヴィ工場に潜入!

これが、サルヴィ・プライドだ。

サルヴィハープスの母なる地・ピアスコ。
世界一のハープたちは、ここで作られ、世界へと旅立ってゆく。
本誌は、長きにわたる交渉の末、通常はけっして公開することのないイタリア・ピアスコの工場内部まで独占取材が許された。現地よりその模様をリポートする。

イタリアの西北、トリノから約60km離れたピエモンテ州に、それはある。ハープの母なる地・ピアスコにあるサルヴィ工場。ピアスコの人口は、約2800人。約6,000平方メートルの中で、100人以上が働いている。1970年代半ばにピアスコの地に定着したが、工場のひとつは1894年に建てられた紡績工場を改造したという。今や創業者ヴィクトール・サルヴィの名を冠した美術館も町の名物であり、サルヴィハープスは、当地の一大産業となっている。当然、熟練工も多いのだが、最も古株の職人で、40年勤めている人もいるらしい。

▲サルヴィハープス工場の外観。近くには、ちょっとしたマーケットも立つ。工場の存在が、コミュニティも支えている。

Special Report from PIASCO

禁断のサルヴィ工場に潜入!

これが、サルヴィ・プライドだ。

▲貴重な観光資源にもなっている、ヴィクトール・サルヴィ美術館

歴史と進化が一体化した環境

この工場をユニークたらしめているのは、いわゆるマーケティング／研究開発部と直結しており、構造・信頼性・音質において最高品質を維持するため、同時に最先端の技術を使用して管理・調整がなされているということだろう。同セクションは、ハープを常に改良するために、新たなソリューションを開発すべく、フルタイムでその任に当たっている。伝統的な技術も大切。しかし、守るだけでは進化は生まれない。楽器の品質を何年も維持するためには、新たな試みも重要なのだ。たとえば、いまEUの環境に関する厳しい規定で、ハープへの塗料などは水溶性の使用を余儀なくされているが、その塗装プロセスの工程にも最先端の機械がすでに導入されていた。一方で、微細な仕上げのニュアンスはいまも職人の手に委ねられている。つまり、一見水と油のように思える職人技と最新鋭の技術が融和し共同作業する、いわば近未来における理想的な作業現場ともいえるのだ。これは、60年以上の歴史を刻んできた老舗ハープ・メーカーにしては、かなり進歩的アプローチだろう。われわれが取材した際、ちょうどヴィクトリアの制作場面に出くわした。サルヴィの最上位の機種ヴィクトリア、取り分けゴールドの場合、最も時間のかかる作業といわれるカラムと基礎部分の仕上げに、彫刻と金メッキを施す作業だけで約3ヶ月かかるという。出し抜けに「では、1台のヴィクトリア・ゴールドを仕上げるのに、いったいどれくらい時間がかかるのか?」と尋ねてみたら、「単純に、10か月はかかるね」と云われた。え、1台で?そこから微調整と箱詰め作業などを足すと、たぶん1年はゆうにかかる。職人は何台も同時進行しないから、専従が付きっきりでやっても1年に1台のペースだ。高価になるのも合点はいくし、その価値に見合うディテールをみれば、納得せざるを得まい。

サルヴィが誇る、工場の内部と
熟達した技術者たち。
一意専心を絵に描いたような情景だった。

上質の楽器を作る誇りと所有する愉しみ

一方、銀座十字屋への問い合わせで、一番多いのが納期の件だという。一日も早く憧れのハープを手にしたい、その気持ちは痛いほど分かる。だが、ありったけの情熱でハープ作りに邁進するピアスコの職人たちの「世界最高のハープを作っている」というプライドと、ユーザーたちの「最良のハープを早く手に入れたい」という気持ちは、今回の工場取材を通じて、少しだけボタンが掛け違っていると思えた。双方の気持ちは、全く同じ方向へ向いている。しかし手にするまでに介在する時間という問題が、それを妨げている。出荷してから、納品まではさらに時間がかかる。船で輸入されるので、その間狂いが生じないよう、弦は敢えて緩めて出荷、コンテナは温度調整が図られた最新のものを調達、到着したら検品され、銀座十字屋の認定技術者による再調整を経て、やっと皆様のもとへ届く。確かに“長い旅”だ。だが、サルヴィは時間を競っているのではない。最上のハープを作り続けるというプライドと、さらにそこから品質を選り分ける銀座十字屋というフィルターが、むしろより価値を高めている、そう思えた。昔から、江戸前の鰻を食べるのに、「良い鰻は時間がかかって当たり前」と相場が決まっている。短気な江戸っ子でさえ、良質へのこだわりの前には了簡した。ハープの質を重んじる皆様なら、ハープ職人たちの心意気を、手にしたハープを弾くことを通じて、必ずや享受することができるだろう。

This is Salvi pride!

KOJI AMADA Collection

Point of PERFORMANCE

演奏のポイント

最初のページの楽譜は、弦をはじき終わったら、全ての指を手の中におさめるように、力を抜きましょう。メトロノームを使った練習も効果的です。次の楽譜は、三連符と分散和音を同時にするのは難しいかもしれませんが、焦らずに。練習をするうちに、だんだん自分の思い通りに、分散和音の幅やスピードをコントロール出来るようになります。最後に、根気のいる指練習のあとは、楽しみながらラクに弾ける、ツェルニー編の「モーツァルトの主題」をどうぞ。軽やかなスタッカートを表現して。最後の両手もスタッカートで決めましょう。

〈22〉

（右）3 2 1

（左）3 2 1

Fin.

D.C.

〈23〉

- - - etc.

（このように つづけます。）

〈60〉

simile

〈61〉

simile

〈62〉

simile

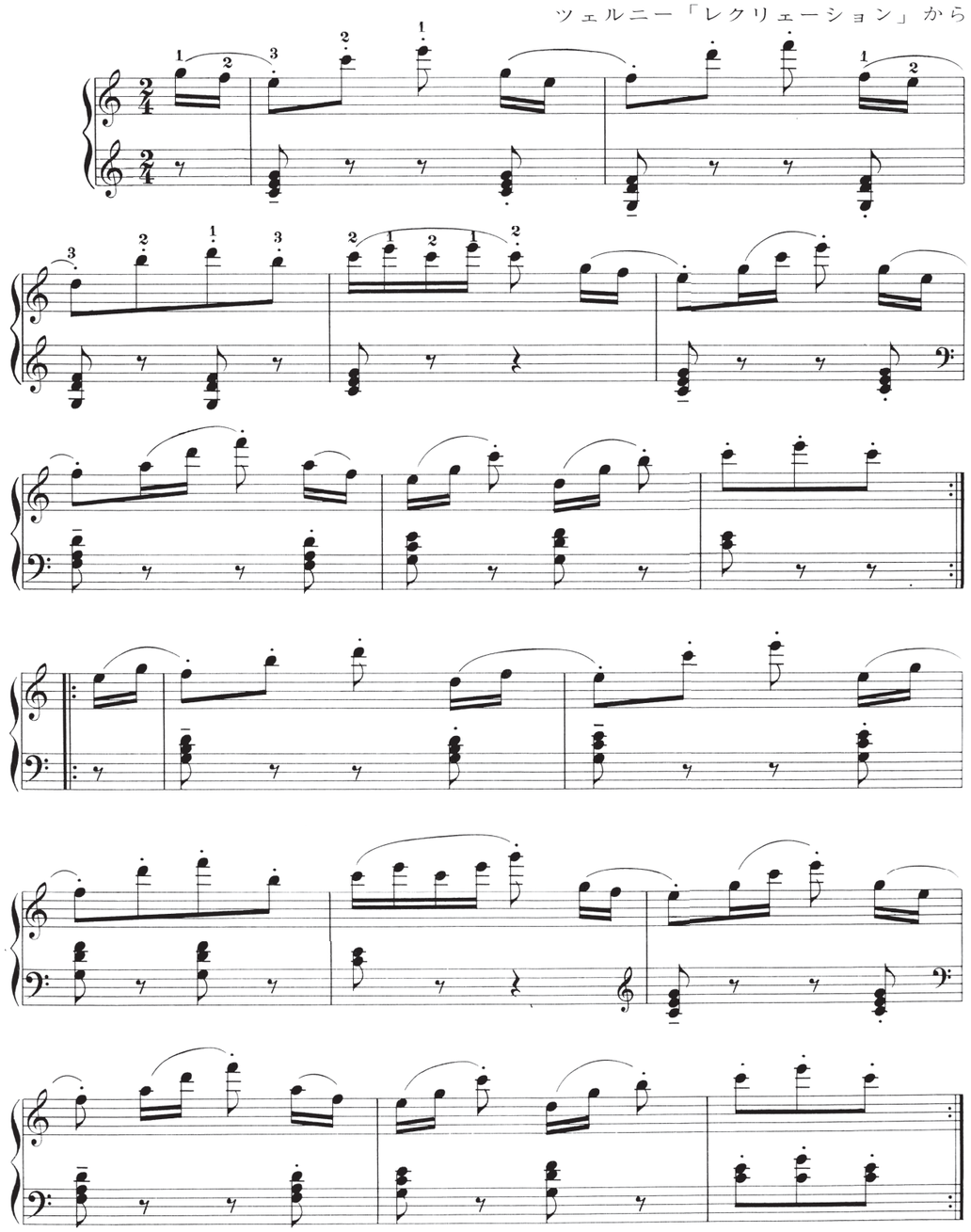
〈63〉

simile

KOJI AMADA Collection vol.3

モーツァルトの主題

ツェルニー「レクリエーション」から



季節のおすすめハープ Vol.7

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「アリオン」です。

グランドの持つ威厳と気品も残した意欲作。

ハープをお買い求めになる際、日本の場合、必ずネックになってくるのが住宅事情でしょう。大いに経済発展を成し遂げたのは良いですが、狭い日本の国土が広がったわけではありません。しかし高度経済成長の時代には、好調な経済を背景に、お子様がピアノを習うのが流行し、グランドピアノが家に入らないご家庭向けに、いわゆるアップライト・ピアノが市場投入されたものでした。ハープの場合は、レバーハープを使用するという手もあるわけですが、やはり本格的にグランドを弾きたいという想いが強い方もいらっしゃることでしょう。しかし、ピアノ同様ハープにおいてもやはり設置スペースの問題は介在し、皆様も思案のしどころかと思います。

そこでサルヴィが提唱しているのが、グランドハープの機能やサウンドはそのままに、大きさをダウンサイジングしたセミ・グランドハープをお使いになってみては、という考え方。コンサート・グランドに比べ20㎝弱低めで、重さも軽量化が図られていますが、響板素材は他の上位機種同様にフィエンメ谷レッド・スプルースが使用され、音の響きの良さを維持しつつ、グランドの持つ威厳と気品も残した意欲作です。写真のARION SG GOLDには金箔が施され、ポリッシュ仕上げが標準で施されることで、さらなる美しさを纏います。

ご要望に応じて支柱の真鍮装飾をお入れすることもでき、まさにちょうどいい“あなたサイズ”のハープとして、末永くご愛用いただけることでしょう。

Arion SG Gold

アリオンSGゴールド

MEETING PRINCE HARP

編集長インタビュー：小林秀吏（ストレス・フリー）

ハープ王子に会ってきた。

「いつまで、ハープ王子できるかな」と呟きつつも、
その目は未来を見据えている。

▲ストレス・フリーは、小林秀吏（ハープ）と矢島絵里子（フルート）のコンビ。

異口同音に人は言う。「最初は、冗談かと思った」と。ストレス・フリーは、小林秀吏（ハープ）と矢島絵里子（フルート）のコンビで、自らハープ王子、フルート姫と名乗って演奏している。装束も童話に出てくる、絵にかいたような王子様・お姫様姿だ。かねてからこのコンビ結成の意図を質してみたかったが、ハープ担当の小林に話を聞いた。

コスプレ好きのハープ奏者なのか、はたまたその逆か。そんな一方的な思惑は、後に大いに反省を余儀なくされる。高校時代、小林は吹奏楽部活動の勧誘を受けた。それまで、むしろ音楽は嫌い。誰もが持つ、リコーダーでの失敗体験がトラウマになっていた。そんなところに、ポツンと誰も手を付けない楽器があった。それが、ハープだったというのだ。ハープの良いところは、どんな素人でも、爪弾くといい音が出ること。この何気ない、実にきれいなハープの響きが、小林の心を動かすことになる。次第にハープに魅せられ、当初は絶対にあるはずのなかった音大への進学まで駒を進め、プロになり今日に至る。

小林の口から出た言葉で、実に印象的だったのが、「音楽は非日常をもたらす」というもの。それは、「なぜ、あなたはハープ王子になるのか」という問いに答えた時だった。「王子服は、戦闘服」と彼は言う。彼本来はあがり症なのが、ハープ王子になると切り替えが利く。この装束でステージに立つと、たとえば老人ホームの方々の表情に赤みがさすし、行く先々で「わあー」という歓声が上がるという。一般のクラシック・コンサートでは大抵スーツ姿。当然お客さんの表情も硬く構えたものになりがちだが、非日常のハープ王子の前だとお客さんの表情がどこまでも明るくなるのだという。自然と演奏する側もリラックスでき、音楽を通じ演じ手と聴き手がまさに“ストレス・フリー”になり、双方共に充足感に満たされるということらしい。

小林のコンセプトに、相方の矢島も当初は相当抵抗したという。だが、音楽とはそもそも音で夢を共有する空間であるとしたら、プロの夢先案内人として皆を魅了する手段は、多ければ多いほどよい。今では彼らにとってコスチュームを身にまとうということは、むしろ当たり前の感覚になりつつあるらしい。柔和さを醸し出す表情、メルヘンチックな音楽志向、こだわりぬいたコスチューム。これらは全て、目の前のお客さんへの純粋なホスピタリティから生まれたものだ。小林の名誉のために言っておくが、彼は何も腹で全てを“計算”しているわけではない。元から仮装は大好きで、今もディズニーランドのハロウィンに個人的に出掛け、記念写真をせがまれては応じているという。クラシック音楽は、演奏が全てであり、技術のたくまざる研鑽にあるという向きも否定しない。一方で、クラシック音楽を触媒にして、自分の美意識に共感してもらい、ハープを楽しんでもらう姿勢も大切な要素だという確信が彼にはある。

取材の最後に、ハープ王子からハーポ・マルクスへの賛辞が出たことには驚いた。チャップリンやキートンの後に、ハリウッドを席捲した喜劇俳優マルクス兄弟の次男。無声映画からトーキーの時代になり、まさにヴォードヴィルで培った音楽や狂騒的ギャグが受け、そのうち無口なキャラクターのハーポが奏でるハープは卓抜なものがあり、アメリカでは彼の存在がかなりハープ人口を増やしたと云われている。かつての小林自身がそうであったように、人はどんなきっかけでハープの虜になるかわからない。ハープが好きで、その可能性はこんな方法でも広げることができる…ハープ王子の秘められた想いは、ハーポ・マルクスがハープを大衆へ解放したように、より幅広い聴衆へと向けられているように感じた。インタビューの後、もはや今では、ハープ王子＝小林とは、徹底したセルフ・プロデュース力に長けた、サービス精神旺盛な音楽的スタイリストであると私は位置付けている。

▲リスペクトするファビウス・コンスタブルを意識して、生徒と共にハープ・アンサンブルも組織している。なお、アンサンブルは現在メンバー募集中。申し込み・見学は、メールにて。sakuraharp@yahoo.co.jp